研 究 題 目

ねばり強く自ら学ぶ子の育成

～ 子どもに学びを委ねる授業実践を通して ～

目　次

Ⅰ はじめに

Ⅱ 研究の概要

Ⅲ 研究の実践

Ⅳ 研究・実践の成果

Ⅴ 今後の課題

長崎県長崎市立稲佐小学校　校長　　岡田　政宏

Ⅰ はじめに

長崎市の中央部、稲佐山のふもとにある長崎市立稲佐小学校は、全校児童 227 名の中規模校である。2024 年 10 月、学校の目の前に民間主導の街づくりとして注目を集めている長崎スタジアムシティがオープンした。さらに、シンガーソングライターで俳優の福山雅治氏の母校である本校は、同氏のミュージッククリップ「トモエ学園」のロケ地の学校として YouTube の公式チャンネルで、子どもたちの学びの様子が紹介されている。そして、今、もう一つ注目を集めている本校の取組が「子どもに学びを委ねる授業の実践」である。

現代社会の諸課題を受け、子どもたちが生きる未来は、不確実性が高まっている。また、生成 AI の急速な普及により、新しいデジタル技術は生活の中に浸透してきており、それらを活用していく力も求められていくだろう。

一方、一人一人の子どもたちに目を向けると、不登校や登校しぶり、外国籍や特別な支援や配慮が必要といった子どもたちが増加しており、「多様性の包摂」や「個々の可能性の開花」といった、キーワードが示されている。このことは、令和５年に施行された「こども基本法」の理念、「すべての子どもたちが個人として尊重され、幸せに生きる社会の実現」（ウェルビーイング）にも示されている。

本校においても、一つの学級の中に、不登校傾向の児童、集中が続かない児童、一斉の説明では理解できない児童、特定領域の能力が高く教師の説明なしに学習内容を理解できてしまう児童などが混在しており、一人の教師による一斉指導だけでは十分な指導効果が得られにくい現状がある。

写真１　稲佐小と教室の窓から見えるスタジアムシティ

これらの現状を踏まえ、教育目標の「たくましく未来を切り拓く子どもの育成」や、合い言葉の「なりたい自分になる」はそのままに、学校経営の重点に「誰もが安心して学べる『学びの多様化に応える学校』」を据えた。本校では、『学びの多様化に応える学校』について、「子ども一人ひとりにあわせた学びの課題や方法が設定され、自己選択・自己決定により自律的に学びに向かう姿が２割程度ある学校」をイメージしている。不登校傾向で通常学級に入室できない児童においても、校内別室 SSR（ｽﾍﾟｼｬﾙ･ｻﾎﾟｰﾄ･ﾙｰﾑ）等を有効に活用するなどし、その中でも可能な限り自己選択・自己決定による自律的な学びを支援していくこととし、誰ひとり取り残すことがない教育実践を進めていこうとしている。

そのような中で、令和６年度から授業実践の柱として位置付けたのが、「子どもに学びを委ねる授業」である。

写真２　級友から教えてもらったり、学び合ったり

Ⅱ 研究の概要

１　研究のねらい

まず、最終的なゴールイメージとしてもっておきたい子どもの姿は、「自立した学習者として、なりたい自分をしっかりともち、中学校そして社会にたくましく旅立っていく子どもの姿」である。

これまで多くの学校では、子どもたち全員が同じ課題を同じタイミングで学ぶ学習スタイルをとってきた。一人の教師で効率的・計画的に授業を進めることができるからである。校内研修制度や教職員の勤勉さもあって、日本の教育スタイルは世界の中でも注目を集めてきた。その結果、例えば本校でも、「めあてやまとめなど、教師が板書したことをきれいに書き写す」「教師や保護者が計画し、準備した学習方法や教材を使って学ぶ」「教師や保護者から指定された課題や、漢字や計算などの反復練習に取り組む」などのような受動的な学習に対しては比較的まじめに取り組む児童は多かった。しかし、2020 年に流行した新型コロナウイルスの影響で休校になった時、子どもたちは教師や親から課題や指示を出されないと、自身に必要な学びを進めることができなかった。これまでの教育活動だけでは、子どもが自立した学習者になることは難しいと証明された瞬間だった。

学習内容の多様化やデジタル教育基盤の登場などによる学習方法の複雑化、先に述べたような各学級内での多様な子どもたちへの対応を考えた時、一斉指導にはおのずと限界があると感じている。今こそ、自立した学習者のイメージをしっかりと持ち、令和の時代を生き抜く子どもたちにとって最適な教育活動へと転換を図っていかなければならない。

２　研究のロードマップ

2025 年の夏、本論文を執筆している段階で、2024 年４月からの歩みを振り返ってみると、日々手探りでもがきながら研究を進めてきたことがわかる。当時まだ、本校ではだれも実践したことがなかった「子どもに学びを委ねる授業」を推進するにあたり、研究主任はもちろん、校長自身も同様の授業を実践したことがなく、視察等で見聞きしたこともなかった。同じ長崎市内で先行研究として対外的に公開している学校もなかった。

1【2024 年】まずは見てみよう、やってみよう

（1） 長崎大学教育学部附属小研修（９月）
（2） 緒川小と天童中央小への視察
（3） 自由進度学習の実践（10 月）
（4） デジタルサイネージと動く学校便り
（5） 課題選択学習の実践（11 月）
（6） 順序選択学習の実践（12 月）
（7） 学び合い、教え合う（協働と援助）

2【2025 年】振り返ろう、そして進もう

（1） 「学び」を揃える（**守**破離）
（2） 「学び」の型を体感する（守**破**離）
（3） 「学び」の日常化を創る（守破**離**）
（4） 県域への研究紹介

3【2026 年】成果は子どもの姿、発信しよう

（1） 子どもの姿で研究公開
（2） 県教委作成手引書への実践提供

図１　稲佐小公式ゆるキャラ「いなるん」稲佐山がモデル

Ⅲ 研究の実践

１【2024 年】
まずは見てみよう、やってみよう

（1）長崎大学教育学部附属小研修

９月５日、子どもたちの下校後に、学級担任等 15 名で、長崎大学教育学部附属小学校へと向かった。目的は、新たな授業スタイル参観と附属小の研究の一端を教示いただくため。この日は、稲佐小の職員のためだけに、附属小の校長先生をはじめ、研究の中心となっている先生に時間を割いていただいた。参観したのは６年生の算数の授業。学習に見通しを付け、自ら課題を選択しながら学習を調整していく内容であった。授業後には、研究について説明いただく時間を設定していただいた。附属小の先生方には、本校の職員のためにわざわざ資料等も作成いただき、先進的な学習方法の実践の記録や理論研究、実際の子どもたちの振り返り、研究のよりどころとしている参考文献等も示していただいた。（図 3 参照）説明の後、本校職員と附属小職員で、子どもに委ねる学びの在り方について、熱い協議を行った。実際に授業を参観し、実践校の教職員から話を聞いたり、質問できたりしたため、実践のイメージが膨らんだ。

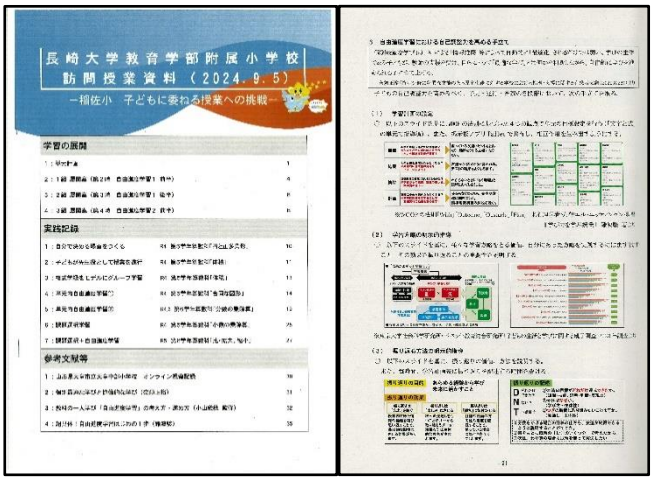

写真３　稲佐小のためにまとめられた附属小の資料

（2）　緒川小と天童中央小への視察

６ 月に本校研究主任が愛知県の東浦町立緒川小学校へ視察に向かった。同校は、47 年も前から個性化教育で注目を集めてきた学校だ。緒川小学校のプログラムは、六つの態様に整理されており、特に興味深いのは、いわゆる単元内自由進度学習を複数教科同時に進行する「週間プログラム（週プロ）」だ。教師が準備した「学習の手引き(学習の流れ)」を道標に、子ども一人一人が学習の計画をたて、進めていく、これがこれまでの継続的な取組によりカリキュラムに位置付けられている。本校でも実践の結果有効であった単元や教材等を共有蓄積することによって独自の「子どもに委ねるカリキュラム」ができていくと考える。

写真４　緒川小の公開研究会のようす

その他、一人一人の子どもが自分の興味・関心に基づくテーマを設定して学習活動を進める自由研究のような「オープン・タイム」、児童会活動として、学校生活をより良くするための「集団活動（独立国活動）」などの６態様を、「個別最適な学び（指導の個別化と学習の個性化）」と「協働的な学び」の視点で整理されていた。

10 月には、校長自ら山形県の天童市立天童中央小学校へ視察に向かった。同校では、四つの授業スタイルが示されており、「仲間

写真５　天童中央小の公開研究会のようす

（子ども）と教師で創り上げる授業」が全体の約８割、「自学・自習」「マイプラン学習(単元内自由進度学習)」「フリースタイルプロジェクト(個人総合)」が約２割といったバランスだ。同校も自由進度学習を柱に捉えており、「マイプラン」は、緒川小の「週プロ」同様であり、自ら計画するという分かりやすく親しみのある素敵なネーミングだ。子どもたちは自分で学ぶ計画を立て、学びを振り返り、計画を修正しながら学びを進めていく。複数の学級が同時に取り組む際は、学級の枠を超えて指導していくという。特別支援学級においても、身近な「買い物」や「公共交通」を題材として自立活動でマイプラン学習を展開している授業を参観できた。「フリースタイルプロジェクト」は、緒川小の「オープン・タイム」同様の自由研究スタイルであり、運動場や家庭科室など、活動のフィールドは、個々人の活動内容によって多様な場所を選んでいる。稲佐小では、「個別最適な学び」を研究の切り口と考えているが、自由進度学習スタイルのような共通のゴールに向かう中で「指導の個別化」を図るものだけでなく、一人一人の興味・関心やキャリア志向によってゴールがそれぞれ違う「学習の個性化」を図る時間設定の必要性を強く感じた。

（3）自由進度学習の実践

「今日の私の学習は、AI ドリルのキュビナを活用しながら課題のクリアをめざします。」10 月１日、稲佐小の６年生教室で、自由進度学習スタイルをめざし、３クラス合同で算数科の研究授業が行われた。課題を共有した後、一人一人がどのように学びを進めていくか計画を立て、自分に合った方法や場所で学習し、最後に出来栄えを振り返るという流れ。本校の合い言葉は「なりたい自分になる」。この自己実現を図るためには、今やるべきことは何か、どのようなやり方が自分に合っていて効率的か、やってみた結果はよかったのか悪かったのか、悪かったらどんな改善をすればよいのか、等をしっかりと考え、粘り強く学び続けなければならない。そんな「学びに向かう力」を授業や家庭学習で育もうという願で組み立てた授業であった。まずはやってみよう精神でチーム６年の職員がチャレンジした研究授業。学びに向かう姿や困難への立ち向かい方について価値付けが今一つという反省も出て、早速次の時間の最初に、子どもたちと再度振り返りを行った。

写真６　初の自由進度学習実践のようす（稲佐小６年）

（４）デジタルサイネージと動く学校便り

６年生の授業の様子は 11 分ほどの動画でまとめ、学校だよりに QR コードや URL を付して保護者へも配信した。（全家庭児童映り込み許諾済み）これから本校が進もうとしている授業実践研究に理解を求めるためであり、家庭にいながら授業参観ができる画期的アイデアである。併せて、これから「子どもに委ねる授業」に取り組む教職員や、何より主役となる子どもたちに見てもらいたいと考え、同年５月に児童玄関に設置した４連大型モニタの連結によるデジタルサイネージ（以後「D サイネージ」）でも繰り返し放映した。この D サイネージでは、この他、学校行事や地域行事での子どもたちの活躍の様子や、委員会活動や総合学習での成果や告知を子ども自らが作成したコンテンツを発信している。

余談であるが、本校出身の福山雅治氏の曲「トモエ学園（稲佐小での映像を収録）」は、黒柳徹子氏の自伝的小説「窓際のトットちゃん」のドラマ版のテーマ曲でもある。この中に登場する黒柳氏（トットちゃん）が通う汽車の学校（トモエ学園）も子ども一人一人の個性を大切にした、子どもに委ねる学びを推進している。

写真７　動く学校だより（長崎国際テレビ許諾済み）

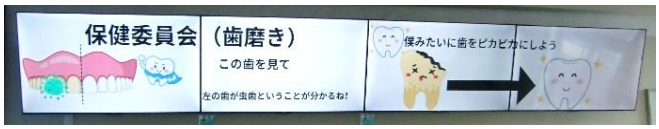

写真８　教職員や子どもがコンテンツを創る D サイネージ

（５）課題選択学習の実践

どのような学習スタイルが適切か判断する際に大切なことは、目の前の子どもたちの実態は当然であるが、学習のねらいの達成、そして教科の特性や題材のもつよさなどが考えられる。そこで、授業者は、５年生の社会科「日本の工業（自動車）」の公開授業をデザインするにあたって、自分で学習の計画を立て学びを進め、課題が達成できた子どもは発展学習に進むという自由進度学習スタイルの要素を盛り込んだ「課題選択学習」スタイルで授業を進めた。自動車の生産に関して、まず、自らが追及する課題を選択するために、既存の「米づくり」の学習で学んだことを活かし、「作り方」「研究」「働く人」「輸送」の４つの視点で予想を立て、本校独自の名称を付けた話し合いの場「しゃべり場」で他者と交流する。追及したい課題を絞ったら、調べる方法を決める。

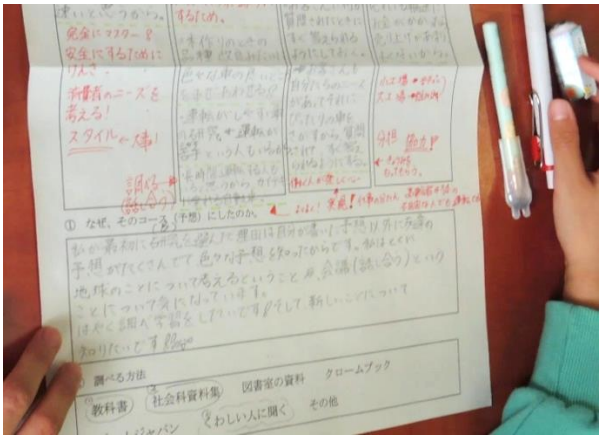

写真６　課題選択学習実践のようす（稲佐小５年）

写真 6 は、調べる方法に「教科書」「資料集」「詳しい人に聞く」を選択した子どものワークシート。て教師は学習の手引きを準備し、それぞれの資料のどのページに関連内容が掲載されているのかを学習の道標として示した。学習のふりかえりでは、「めあてをしっかり考えられたか」「考えを発表したり、友達の意見を聞いたりできたか」「自分の良いところを出すことができたか」の

各項目をほぼ全員が高評価を付け、早く調べてみたいという意欲があふれていた。次の時間は担任が不在であったため自習となったが、追求の鬼となった子どもたちの中におしゃべりをする者は一人もいなかった。

写真７　自習時間、選択した課題を調べる（稲佐小５年）

（６）順序選択学習の実践

低学年の担任の多くが、子どもたちの「自己選択・自己決定」の最初の経験として多く実践したのが「順序選択学習」であった。学習内容と学習方法は教師が決め、子どもたちはどんな順番で学びを進めるかを選択し実行する。一見単純そうに思えるのだが、いずれのクラスの実践においても「自分で考えて選ぶ」ということは、子どもたちにとって魅力的なことで、終始意欲的に学びに向かう子どもたちの姿があった。「得意な内容から取り組みたい」「かけ算を早く覚えたい」と自分なりの理由をもって自己選択・自己決定をしている子どもが大半であったが、中には「パソコンが好き」という理由で学習者用パソコンの AI ドリルから始める子どもがいた。発達段階に応じた指導が必要となるが、「今の自分にとって必要な学び」、「自分の特性や学習の定着度に適した学習方法」などを振り返る機会を適宜設け、教師が支援したり、価値付けたりしていく活動を学校全体で共有・実践していくことで、子どものメタ認知能力も少しずつ向上していくと考えている。

写真８　順序選択学習実践のようす（稲佐小１年）

（７）学び合い、教え合う（協働と援助）

研究１年目、子どもに学びを委ねる授業に学級担任全員が様々な授業スタイルでチャレンジすることができた。その中でいつも出ていた課題の一つとして、一人の教師で個別に活動している子どもたち全員を見取ることや適切な支援をすることの困難さだ。１-（３）に記載した６年担当教師がチームになって自由進度学習の実践を行ったのもその対処策の一つである。この時は、６年生約 40 名に対して、３名の教師で支援やチェックポイント確認などを行ったが、完璧ではない。これも方法の一つとは考えられるが、授業の基本は担任一人。解決の手立てとしては三つが考えられる。一つ目は、一人一人の子どもたちが学びを進める上での道標となる「学習の手引き」的なものの作成と共有。二つ目は、一人一人の思考活動の可視化。三つめは、子どもたちが二人目、三人目の教師役となり、困難にぶつかっている友を援助することである。

初年度の後半の授業からは、この「可視化」や「ミニ先生」を意識した手立てが講じられた。ネームプレートやクラウド座席表、教師の見取りや子どもの気付きなど、行動のきっかけづくりはさまざまであったが、活動が進んでいる子、理解が早い子は活動

写真９　困っている友達へのヘルプ（稲佐小１年）

が停滞気味の級友に対し、子どもの言葉で一生懸命説明を試みていた。しかし、自身の学びを進めることに終始する子どもも多くいた。他者への教示こそ、学びの定着や深まりにつながることの共有、学級内の教え合える土壌となる信頼関係の構築の手立て等、カリキュラムマネジメントが必要だ。

１【2025 年】
振り返ろう、そして進もう

（1）「学び」を揃える（守破離）

なぜ「学ぶ」のか。これは、人それぞれ、さまざまな見解があることと思われる。本校には、「なりたい自分になる」という合い言葉があるが、まさにどのような自分の人生を創っていくのか、どのような自分を創っていくのか、そこにこそ一つの答えがあると考えている。2025 年、新入生が入学してすぐの４月当初、全校一斉にオンライン授業を実施した。なぜ「学ぶ」のかについて、校長自らが直接子どもたちに語り掛けるためだ。続いて、全員が安心して学びを進めていけるようするための授業規律やこれまで本校で受け継がれてきた「いなさの学び」について、実際に教師と子どもが共に進める５・６ 年生の授業を全校で視聴した。新たに転入した教職員や新入生にも学びの基本が具体的なイメージとして伝わった。併せて、この様子を録画した動画をクラウド上に保存し、学校だよりとして各家庭に配信し、全ての保護者にも視聴いただいた。学校と家庭が同じビジョンをもって子どもの成長を支援していくためである。

写真 10　４月当初の全校一斉オンライン授業のようす

「子どもに学びを委ねる授業」の推進にあたり、本校で大切にしているのは「安定した学習の基盤」である。令和５年度まで、学力向上モデル校として、「協働的な学び」にスポットを当て、特別活動を要として研究実践を進めてきた。その中で、誰もが安心して学習に取り組める学級内の環境を大前提とし、学級・学年の壁を越えた一定の学習規律を揃えることが、学力向上に大きく関わることを実感してきた。そこで図 ２のピラミッドイメージで示しているように、まずは、生活の安定を図っていくための取組を粘り強く全校で進めていくこと。その上で、図３の「稲佐小学びのスタンダード」や「いなさの学び」といった最低限揃えていきたい学び方を共通理解・共通実践していくこと。この２点を「子どもに学びを委ねる授業」推進の屋台骨とした。

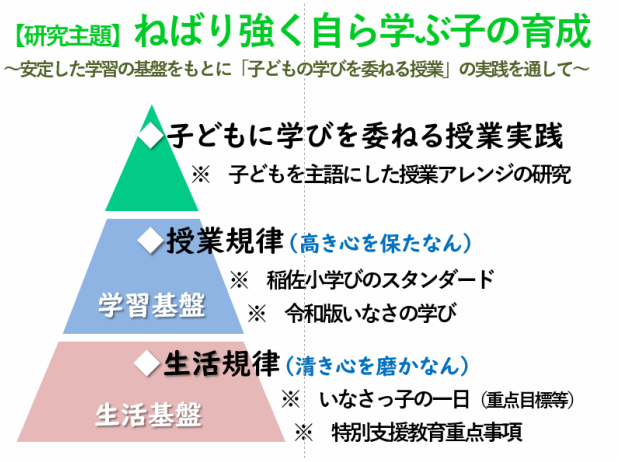

図２　安定した学習基盤が委ねる授業の大前提

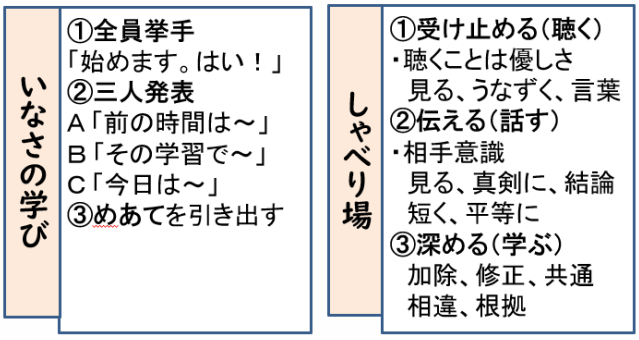

図３　授業開始時の活動や話し合い活動について揃える

本校の校歌のサビの部分に「清き心を磨かなん」「高き心を保たなん」という歌詞がある。まさに、生活規律と学習規律と通ずる不易の部分である。

茶道や武道に「守破離」という教えがある。「守」は流派の教え、型、技を確実に身に付ける段階。「破」は他の流派の教えについても考え、良いものを取り入れ、発展させる段階。「離」は独自の新しいものを生み出し確立させる段階である。

デジタル教育基盤の普及等により、明治以来の大きな教育改革と言われている令和の学び。私たち教師の授業に対する考え方もこの「守破離」に学ぶ部分があると考えている。本校で徹底を図ろうとしている「安定した学習の基盤」を揃えるという取組は、まさに「守」の段階である。もちろん、生徒指導や学習指導における、一人一人の教師の指導力は、不断の努力によって学び続けていかなければならないことは言うまでもない。これらの段階を踏まえたうえで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善のキーワードが「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実であり、「子どもに学びを委ねる授業」スタイルで実現できると考えている。

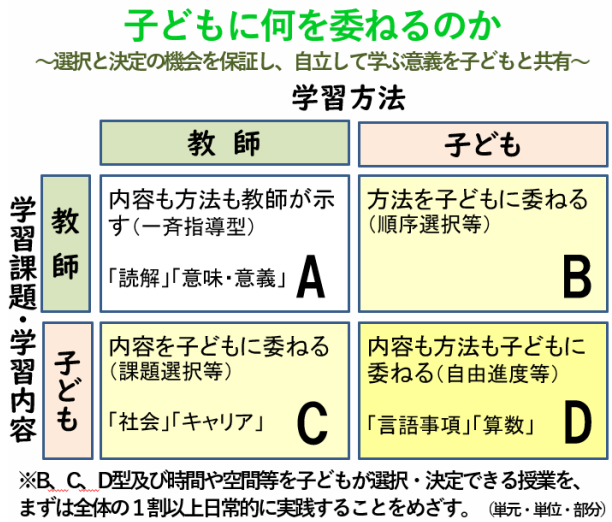

図４　子どもに委ねる内容の基本パターンマトリクス

では、子どもに何を委ねるのか。教科の特性やそれぞれの教材・題材のねらいを達成させるために、子どもたちの実態を踏まえ、教師が単元全体を見渡したうえで、授業デザインを組み立てる必要がある。図４は、「学習課題や学習内容」そして「学習方法」について、子どもと教師の選択権・決定権のバランスを整理したマトリクスだ。

学び方を子ども自身がマスターしていけるよう、困ったときにどのような行動をとればよいのか子ども自身が判断していけるよう、教師は授業の中でコーチとなり指導していかなければならない。子どもがなりたい自分の姿を実現できた時は、大いに賞賛し、一般化できるように全体の場でしっかりと価値付けをする。これまで、授業の

まとめの段階で、学習内容について「わかったこと」「できるようになったこと」などをまとめていたが、子ども一人一人の「学びの姿・学びの在り方」についても、それぞれがステップアップしていくことを信じ、しっかりと振り返りの時間を確保していかなければならない。具体的な授業者へのガイドライン作成は、これからである。

（2）「学び」の型を体感する（守破離）

全国では、多くの学校が、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改革を行っている。その中には、本校がまだ取り組んだことがない授業スタイルも数多くある。どこかで聞いたことはあるが、それがどのような授業で、どのような授業準備が必要で、子どもたちに真の学力を付けていけるのか分からない。多くの職員が不安を抱えたまま、まずは見てみよう、やってみようの精神で船出したのが令和６年度。令和７年度になり教職員の人事異動があり、本校に６名の担任が転任してきた。この６名もまた１年前に不安だった職員と同じ境遇でいた。いや、むしろ後から来た者のプレッシャーもあったかもしれない。そこで、４月の全校一斉オンライン授業に続き、昨年度の授業実践の様子の動画（写真 11 参照）を全員で視聴し、共通イメージを持てるようにした。ここで、威力を発揮したのが、前年度に動画編集したものをデジタルサイネージと動く学校便りで発信していた実績だ。やはり、映像の持つ力は大きく、１年前に附属小や他県の先進地の様子を見た時と同じ感覚を持つことができた。１年前は手探りで、なかなか授業づくりについて話ができなかった職員も、自身の実践の動画を見ながら授業づくりや授業当日のようすを振り返った。

写真 11　クラウドに保存した編集された授業動画

本校は、視察に行った２校のように「自由進度学習」という一つの型を決めて全校で進めていこうとしているわけではない。それぞれの教師の持ち味や担任ならではの創造性の部分を大切にしたいと考えるからである。しかし、実践もしていないのに、メリットやデメリットを論じることはできない。なぜ、全国でこのような型が主流になろうとしているのか、次期学習指導要領に求められようとしているものは何なのか、教員自身の肌感覚で理解してもらうためには、やはり一度やってみるしかない。研究授業を契機に、全職員に「まずは見てみよう、やってみよう」と言い続けている意図はそこにあり、守破離の「破」がそこにある。しかし、単元内自由進度学習を実践するにあたっての教師側の準備は尋常ではない。まずは、単元を通した教材研究が必要なのは言うまでもない。「学習計画表」や「学習の手引き」の作成と拡大印刷。参考となる WEB サイトや子ども用授業動画のリサーチ、様々な学びの環境整備、評価基準となるルーブリックの作成、活動の可視化ツールの吟味、子どものニーズに応じた課題の準備等々。毎時間こなすのは、物理的に不可能であり、目標として学期に１回程度の実践が適切と考える。

2025 年の１学期、研究主任は、昨年度実践がなかった国語科の自由進度学習に挑戦し、校内全体授業として公開し、長崎市

教育委員会の指導助言を受けた。２学期には視察した先進校を参考に２教科同時（理科・家庭科）の単元内自由進度学習を計画中でもある。他の職員もこれに続いていく。

また、研究の仮説を再整理し、子どもに付けたい三つの力として「①メタ認知能力」「②計画・実行する力」「③乗り越える力」と焦点化させ、結果として知識・技能の習得に加え、思考力、判断力、表現力、主体性やねばり強さ、多様な人々と協働する力など、変化の激しい社会を生き抜くための総合的な力（生きる力）を身に付けていけると考えた。

（3）「学び」の日常化を創る（守破離）

様々な授業の型を見たり、実践したりしながら、手探りで研究を進めてきた。しかし、特別な研究授業の時だけ、子どもに委ねる授業をしているようでは、先の三つの力を子どもに育んでいくことはできない。これからは、「日常」に立ち返り、どのような教科で、どのような場面で子どもたちに委ねていけばよいのかを蓄積し共有を図っていきたい。今年度から実践に追加しようと考えている自由研究的な学習（「学習の個性化」）と併せ、先進校に習い、後から来る教員たちの道標となる独自カリキュラムへと進化させていかなければならない。そうでなければ、研究は一過性のものとなってしまう。拙い実践ではあるが、２０２５年の１１月には、その一端を県内に紹介する。また、2026 年には、何らかの形で子どもたちの学びの姿を公開しようと考えている。長崎県教育委員会が進める「令和の長崎スクール」の協力校として、県内の教職員に届ける手引書の中で、具体的な実践の進め方を伝えていきたいと考えている。そして何より、本校の子どもたちが「なりたい自分」に近づけるよう支援を続ける。

Ⅳ 研究・実践の成果

今回の研究・実践の成果としてあげられることは多くあるが、その中から以下に５点をあげる。

① 各自の不安は大きかったが「まずは、やってみよう。」の精神で、初めての取組に教職員が果敢に挑戦できたこと。

② 実践したからこそ肌感覚で子どもの反応や授業スタイルの長所・短所・課題が見えてきたこと。

③ 共に次代の令和の学びへの転換を意識し、教え合い助け合いながら職場の同僚性を高めたこと。

④ 子ども一人一人の学びの見取りや可視化の重要性、振り返り場面におけるメタ認知の育成の必要性が分かったこと。

⑤ 何より、子どもたちが学習を委ねられたことで主体的・意欲的に学びを追求していく姿がみられたこと。

以下は、子どもに委ねる授業を実際に体験する前と後に行った子どもたちへの授業アンケートである。

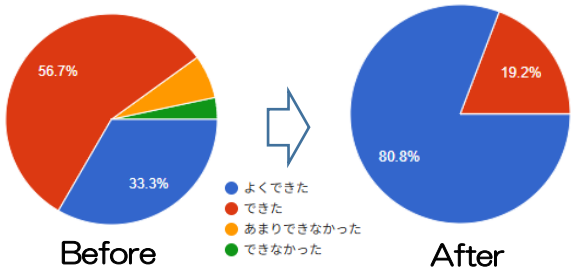

図５【児童アンケート】「稲佐小 学びのスタンダードのルールを守って学習できていますか。」

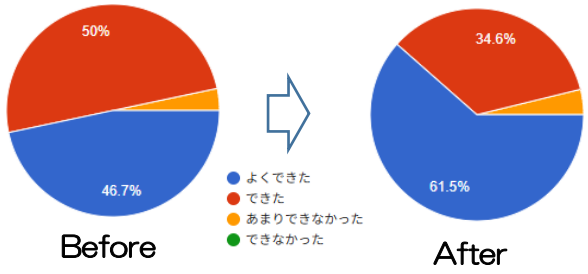

図６【児童アンケート】「自分の好きなことや、得意なことを考えて、自己選択・自己決定して学びを進めていますか。」

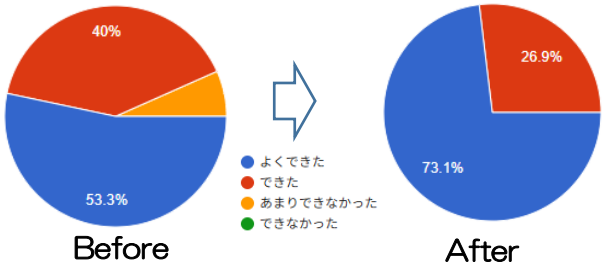

図７【児童アンケート】「教科書やワークシート、パソコン等をうまく組み合わせて使うことができていますか。」

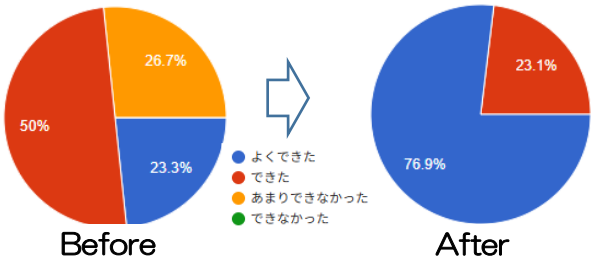

図８【児童アンケート】「困ったらだれかに相談したり、早くできたらだれかに教えたりできていますか。」

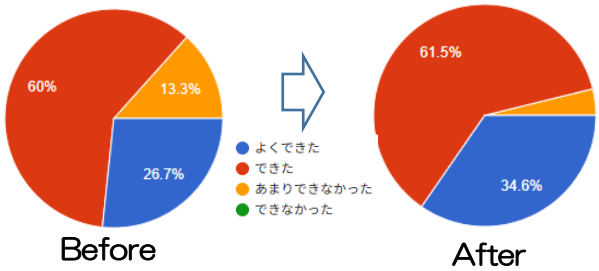

図９【児童アンケート】「自分の学習の進め方を見直して、さらによりよい学びにしようとしていますか。」

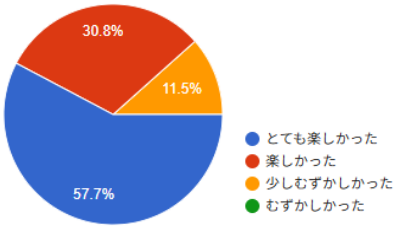

図 10【児童アンケート】「子どもに委ねる授業（単元内自由進度学習）は楽しいですか。」

私たち教師は、授業の良し悪しを論じるとき、常に子どもの姿で検証することを忘れてはならない。その上で、子どもたちを一段上の高みへと登らせていくのが教師の役割であり、教師のやりがいでもある。

Ⅴ 今後の課題

今後の課題として、本校教職員の意識調査アンケートから考察する。

まず、図 11 からは実践を通してこそ、めざす子どもの姿がはっきりと映像としてイメージできるようになったことが分かる。教師の多くは、走りながら考えることに苦手意識を持ちがちである。それは、子どもたちに最善の教育を提供しなければならないという責任の自覚とこれまで積上げてきた研究・研修のプライドであろう。

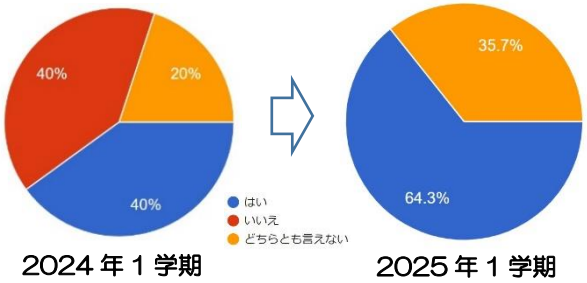

図 11【教職員アンケート】「稲佐小がめざす子どもの姿がイメージできていますか。」

図 12 からは、「子どもに学びを委ねる授業」の実践を進める上で「授業デザイン」「メタ認知能力の育成」「個別に活動する子どもたちの状況把握」に最も難しさを感じており、次いで「主体的に、粘り強く学びに向かう態度の育成」「振り返りの充実」「教材研究や授業準備」と続いていることが分かる。

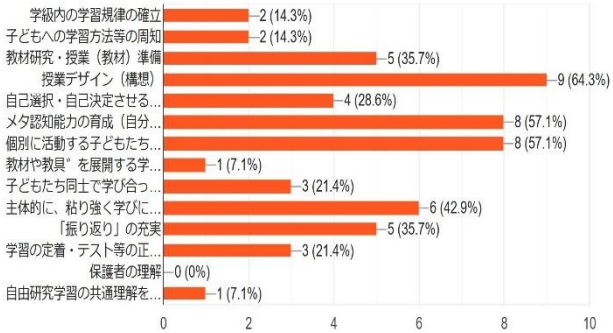

図 12【教職員アンケート】「『子どもに学びを委ねる授業』の実践で難しいと感じることは。」

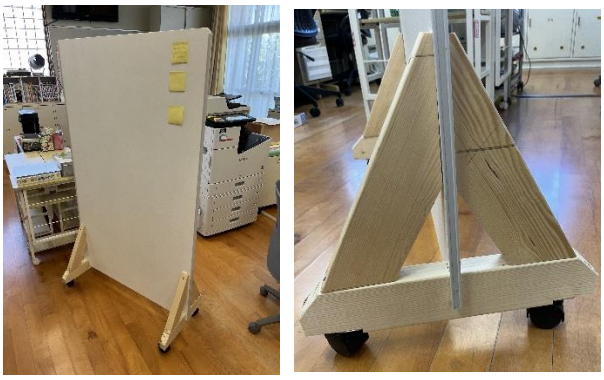

写真 12　手づくりの資料掲示用ボード（試作品）

授業環境の整備として、子どもの学びの道標となる学習の手引きや資料等を掲示するボードを多数必要とする声が聞かれた。市販の掲示ボードは高額で、学校配当予算では数台しか購入できない。そこで、地元の木工が得意な児童委員民生委員をされている方に相談し、手づくりで制作していただけることになった。今後は、各フロアに潤沢に掲示環境が広がる。経費は、本論文執筆における助成金を使わせていただきたいと考えている。（市販品の約 1/10 の経費）

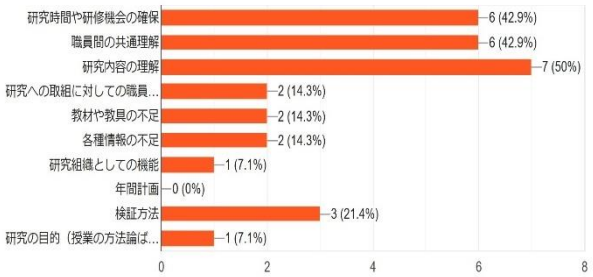

図 13【教職員アンケート】「『子どもに学びを委ねる授業』の実践で難しいと感じることは。」

図 13からは、「組織面・運営面での本校の校内研修の課題」として、「研究内容の職員間の理解」「研究時間や研修機会の確保」そして、「検証方法」などが上がっている。これらを受け、研修時間や内容を見直すとともに、図 14 に示しているような今後の研究の全体構想を整理し直した。併せて、研究仮説を検証する７つの方策を計画することとした。

特に、「学び」の日常化を創る（守破離）上で以下の３点の課題について、アプローチを図っていきたいと思う。

① クラウド上の共有シートで委ねる授業の実践を共有する。（成功授業体験と日常化イメージの共有）
② 環境をさらに整備する。（人・物・時間、特に子ども同士の信頼関係構築と学び合い教え合いの風土）
③ 稲佐小「子どもに委ねる授業」推進のためのキーワードや研究内容のさらなる共有。（長崎県教育委員会作成の「令和の長崎スクール『全市町連携型　令和の生きる力育成プロジェクト』手引書（仮称）」への実践事例の提供）

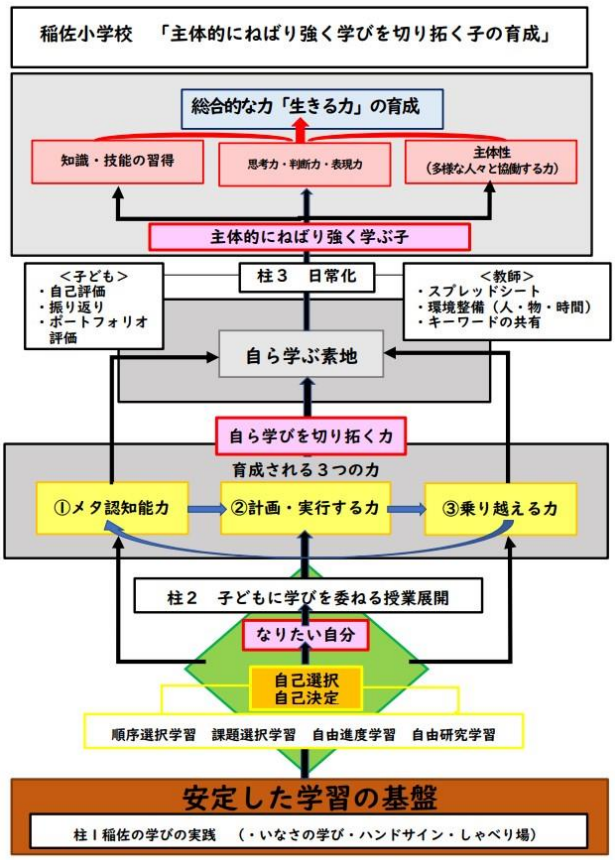

図１４ 稲佐小 研究の全体構想見直し（案）